

四 (現代文) 採点基準 (文科のみ・合計20点)

(一) 5点

A (1点)

B (1点)

(模範解答例) 意図もなくただ現実の世界をなぞっただけで、際立つものもない写真による背景の表面化は、C (3点)

我々に現実の世界の対峙を迫り、現実そのものについての解明をも要請するから。

A・Bについては、根拠も近いので、これに近い表現でなければ原則不可。

Cの採点は非常に難しい。かなり遠くの根拠を拾わせているだけに、いろいろな解答が出ることが考えられる。次の2つがポイント(①だけでも部分点を与える。①②満たすと、C項目満点。)

①まず「現実」というポイントを押さえていることが必須。このワードが入っているだけで、1点与える。

②その上で、「対峙」↓「解明」という流れを押さえて、2点与える。

△「現実」 感覚・認識を揺さぶる」「狂わせる」等の説明だけで、「対峙」↓「解明」に触れていないものは、②△ (1点)

Cで、「現実」という語を用いずに、「イメージの解体・崩壊」などと説明したものは、Cで1点配点。

※文末は「から・ため」が適当。それ以外は1点減点。

(二) 5点

A (1点)

B (1点)

(模範解答例) 連続的で曖昧な現実から、写真は一つのイメージを切り取り、

C (1点)

別のコンテキストに移し変えて固定(凝結)するが、

D (2点)

一方でカメラの介在なしに現実を見ることが不可能になること。

Aは「連続」、「曖昧」の両方の説明がないといけない。片方しかないものは不可(0点)。

Bは「特定のイメージ」も可。

Cは「現実を置き換える」も可だが、「固定」or「凝結」がなければ不可(0点)。

Dは「カメラアイによって支配される」とだけ書いたものは△(1点)。

※文末は「こと・〜ということ」が適当・それ以外のものは1点減点。

(三) 5点

A (2点)

B (1点)

(模範解答例) 背景に焦点を当てて際立たせると、

それまでの図と地の関係が逆転するだけで(今度はその背景だったものを際立たせてしまい)

C (2点)

際立つものとそうでないものが差異化する状況がいつまでも写真により生み出されること。

※「背景」は「これまで際立っていないなかったもの」という表現でも可。

Cは「差異」がなければ、1点減点。「区別」ではだめ。

そして「写真そのものの機能」であることの説明であることが望ましい、よって「写真」という言葉がなければ1点減点。

※文末は「こと・〜ということ」が適当・それ以外のものは1点減点。

(四) 5点

A (2点)

(模範解答例) 現代消費社会の背景としての川底から露呈した、忘れ去られていたものが

B (1点)

実は消費の社会の、まさに表層においての

C (2点)

人々の消費欲望の成れの果てにすぎなかったということ。

Aは次の①・②のどちらかで可(2点)。

① 「現代消費社会」 + 「背景」の二語を用いている。

② 「川底」 + 「背景」の二語を用いている。

△ 「現代消費社会」または「川底」の語がなく、「背景」だけあるものはA△(1点)。

Cは文中の表現でないだけに慎重な採点を要する。

「イメージ」、「残骸」の言い換えは、文脈に即していると判断されれば、それぞれ1点ずつ与えてよい。
特に「イメージ」の採点に注意されたい。

※文末は「こと・こと」ということが適当・それ以外のものは1点減点。